

那須さんの北京語：中国語の達人たち

上尾, 龍介
九州大学教養部：助教授

<https://doi.org/10.15017/9753>

出版情報：中国文学論集. 11, pp.7-20, 1982-10-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

那須さんの北京語

——中國語の達人たち——

上尾 龍介

福岡の街もすっかり變つてしまい、今となつては自分の足で歩いてでもみない限り見當もつきかねるのだが、西鐵グランドホテルの南側に、水城學園という預備校の舊校舎があった。その邊りは空襲で焼け残った所で、あまり廣くない道路が入り組んでいて、舊いくすんだ家並みがあった。「紺屋町」「小姓町」などといった今はなくなった古い博多の町名が、その邊りにはあって、土地の歴史を感じさせる一帯であった。九大に赴任された當時の那須さんのお宅は、その邊りにあった。

或る日何かの折りに、目加田先生から、分校に那須さんという中國語の先生が來られたが、訪ねて行ってごらん。というお話があった。學制改革で、九大も改編されて新たに「分校」というものが設けられていたが、舊制大學の學生として入って來た僕達には、分校などというものがピンと來ず、何か別な學校でもあるかのような感じがあった。「きみの先輩に當る人じゃないかな」という先生のお話もあって、早くお目にかかりたいものだと思う

那須さんの北京語（上尾龍介）

た。その頃はまだ「中國文藝座談會」も組織される前で、分校（今の教養部）の先生とも學生達とも全く没交渉であつた。

當時はひどい住宅難で、空襲を受けた博多では、それは殊にひどかつた。那須さんは、軒の低い二階家の、その二階に間借りして住んで居られた。當時の中文研究室は、軍隊歸りの年嵩の學生が多く、巴金研究で知られるようになった樋口進氏や、長崎大學に居る中田喜勝氏などは、既に三十歳を越えていて奥さんもあつた。だから初めて那須さんを訪れた時、何よりも、若い先生だなとそう思った。

この邊りは、當時あまり人通りもなかつたが、何かの職人さんでも住んで居そうな、しもた屋ふうの家を探し當て、低い軒をくぐるように入つて、遠慮がちに聲をかけると、二階から返事があつて、やがて、つかえそうになる頭を氣にする恰好で、若い人が階段を降りて來られた。その人はカーキ色の將校の軍服を着て居られた。そして、生まじめな顔で

「どうぞ、狭い所ですが」

と、二階に上るようすすめられた。二階の天井は低かつたが、外から見たよりは廣いなと思つた。やがて夫人も上つて來てお茶をすすめられた。青白い神經質な感じの那須さんとは反對の、丸顔の眼の大きな奥さんであつた。話しかけるたびに、僕が「先生」と呼びかけるので、お二人はそのたびに、

「その「先生」はやめて下さいよ、何やら具合が悪いから……………」

と慌てたように言われる。それじゃ何と呼べばよいのかと困つてしまつたが、仕方なく「先輩は……………」と呼ぶこと

にした。だが、この「先輩は」という呼びかけは、何とも座りの悪い、どこか未熟な感じの日本語である。そんなことで、いつの頃からかこれもやめてしまつて、時に「先生」と呼んだり時に「那須さん」と呼んだりするようになつてしまつた。それは今日まで續いている。

那須さんのお宅に伺うと、きまつて南京豆を皿に盛つて出された。これは中國に居られた頃の名残りであつたらうかと思ふのだが、戦後の物のない時代だったので、それは贅澤なものに思えた。だから僕は、南京豆を食べに時々那須さんのお宅へ伺つたものだ。しかし、當時の那須さんのお宅は甚だ貧乏であつた。あの頃は大學の先生のみならず、闇商人を除けば國民残らず貧乏であつたが、中國（舊滿洲）からの引揚者であつたということが、貧乏の程度を一般よりひどいものにしていたようであつた。那須さんの軍服姿は相當長い間續いたように思うが、この軍服の愛用というのは、それが生地も仕立てもよいからという理由からだけの愛用ではなかつたと思う。

那須さんの生家は旅順にあつて、父君は知られた企業家であつたようだ。旅順ではサイダー工場を經營して居られ、商工會議所のビルも那須家の所有であつたという。敗戦で家族と資産とを共に失い、自分は戰場から單身復員して來られた那須さんの戦後は落莫たるものであつたに違いないが、その孤獨の影はその後の那須さんにずっと尾を引くように付きまといつていたように思われる。戦後の那須さんには、京都でも福岡でも、異邦人の思いが常にあつたのではないか。奥さんは京都の古い染物屋のお嬢さんで、生粹の京都人であつたので、折にふれて伺う京都の話は僕には珍しいことが多かつた。たしか、おばあ様に當られる方が、お若い頃京都御所に出仕して居られたとかで、

「うちの祖母はね、孝明天皇のことを、ずっと孝明はん、と呼んでおりましてね……」

という話を伺ったことがあるが、それは妙になまなましい感じで記憶に残っている。そんな京育ちの奥さんのことであるから、何かにつけがさつな福岡の空気にはなかなかなじまれないようであった。奥さんもまた長い間不協和感を抱いて居られたのかも知れない。或る時、こんなことがあった。

「こちらの人は、何見ても「クサ」言わはるんですね」

と言って、何となく赤くなって、可笑しそうに笑われるのである。福岡の言葉では、話の切れ目にしばしば「クサ」という終助詞を入れる。普通語で——というより東京地方の言葉で——「だけどサ」という所を、福岡では「ばってんクサ」と言うのである。これがよほどおかしく響くらしく、ひとしきり話題となったのであった。その時、

「もっと南の地方では、ばってんクサイ、と言うんですよ」と話す。

「まあ、そんな、——うそばっかり」

と言いま終えず、眞赤になって笑いこぼられるのであった。そして歸りがけに、また面白いお話、聞かせてくださいね。と京都風の抑揚で言われたものだ。

當時はまだ、出入りする近所の人も少なかったのであろうか。何となくひっそりと、どこか淋しげに暮して居られるようであった。

そんなことで、異邦人である那須さんの話は、その落着く所、きまって中國のことであった。それも北京の學生時代の話が多かった。那須さんと話していると、東單ドンダンに練兵場があった頃の、あの少し寂れた、どこかに亡國の駭ハヤシのただよう古い懶い北京を、とめどもなく思い出すのである。それは老舎の描く「四世同堂」の舞台であり、「駱駝祥子」のあの貧しい車夫たちのたむろする街角であつたりした。そんな時、しみじみと那須さんを身近な先輩だと思ふのだった。六月になると、東長安街の朝の舗道にはいちめんにかカシヤが散っていたが、それを踏んで學校にかよつた日のことを、夢見るように思つたものだ。

那須さんの母校は北京興亞學院である。この中國語の専門教育機關の歴史は、上海の東亞同文書院と共に古い。同文書院の前身、南京貿易學校は明治三二年南京に開かれ、興亞學院の前身、清語同學會語學校は明治三十六年、北京に開かれてゐる。この清語同學會の淵源となつたのが、北京東單一條胡同に開かれた支那語研究會であり、明治史の側面に現われる沖禎介、横川省三の兩氏が共にここに學んだことが學内に語り繼がれて、敗戦時に至つてゐる。この北京興亞學院は歴史の流れの中で、昭和十八年、東亞同文會に吸收合併されて北京の分校となり、十九年、二十年の入學生は全員同文會の給費生で占められることとなり、ここに明治以來の獨特な私學としての同學會語學校——興亞學院の歴史は發展的に閉じられることとなり、やがて敗戦を迎えた。

現在の強大な中國は、北京語言學院などを設けて、外國人への中國語教育を國家事業の一環としておこなつてゐるが、清末から民國にかけての混亂の中においては、このような教育機關の設置は望むべくもないことであつた。そのような情況下にあつて、それがさまざま理念を背負つていたにせよ、中國語の専門的教育の面において

見る時、この兩校が、今日の語言學院の役割を擔っていたことは否定できない。

那須さんの中國語の何よりの特徴は、その純粹とも言うべき發音の正確さにある。その正確さは「精密機械」という形容をもって表現するのが當っているかも知れない。それは全くどうしようもなく純粹な、美しい北京語なのである。倉石武四郎先生が、那須さんの中國語を初めて耳にされた時、

「日本人でも、こんな發音ができるのか」

と洩らされた。という話は有名だが、その那須さんの發音は、興亞學院の中國語教授であった高玉珊先生の中國語に生き寫しなのである。

當時の學院には、常時十數名の中國人教授が在勤し、譯讀、作文、文法、尺牘、公文、時文、發聲法、朗讀、言語學などを擔當されたが、これだけの多様な中國語の時間を持ちながら「會話」の時間というものが設けられていなかったのは、日本語を使わない毎時間の授業そのものが、標準の會話だったし、學内の誰一人として日本語はできないのであるから、朝起きて寝るまで、すべてが生きた會話の時間だったからだ。

中國語の教授たちは、親切なおだやかな中國の讀書人であったが、中でも主任の高玉珊先生が、學生達の記憶に最も鮮明に残っている。那須さんの最近の文章（文學論輯二十八號）にも高先生のことを懐かしく語られているし、僕の同期の仲間たちも、北京の話になると、きまって誰かの口から高先生の話が出るのである。僕たちは高先生のことを Gao Xiansheng と呼んだ。誰も「コウ」先生などとは言わなかった。それは古い先輩の時代からの呼び方だったようだ。

高玉珊先生は清朝の貢士であった。

北京大學文學士だとか東京帝大法學士などといった肩書の先生達の一覽表の中に、「前清貢士」という肩書の教授を見出して、入學當時の僕は驚いた。これはまるで東洋史じゃないか。と思ったのだ。當時の僕には、貢士がどれくらいエライのか見當もつけかねたが、後年、宮崎市定氏の「科擧」を手にするに及んで、貢士の重みをはじめて實感したのであった。宮崎氏によれば、擧人を集めて北京の貢院で開かれる「會試」に合格すると貢士となり、最後に残された形式的な「殿試」を経ると、この貢士たちが晴れて進士の稱號を得るのだという。しかし一九〇四年五月を最後として科擧は廢止されているというから、高玉珊先生の肩書が「前清貢士」である所を見ると、先生は、若年にしてすでに貢士に擧げられ殿試の機會を迎えぬまま科擧の廢止の時を迎えられた非運の學究であったのであらう。

その高先生はいつもくすんだ色の大襟兒をまとって、ゆっくりと教壇に立ち、學生達の顔を一人ひとり眺めるように見渡すと、にこっと笑って出席を取りはじめられるのであった。

學院には田中という若い講師が居られた。この先生はほんの數年前の卒業生であったが、學生達は尊敬していた。それはその發音が高先生と寸分違わなかったからである。戦後、那須さんとお會いして、その中國語をちらと聞いた時、思わず那須さんと田中さんの顔がオーバーラップして見えたことを覚えていた。後年その話をする時、那須さんは黙って笑っておられた。田中さんの押しつぶしたような聲や那須さんの多少神經質な聲などの背後に、それとダブるように、高先生の潤いのある丸い聲が、今も懐かしく耳の底に残っている。生粹の老北京であった先

那須さんの北京語(上尾龍介)

生の發音は、玉を轉がすような丸い透明な音であった。生意氣な學生達も——中には顔じゅう髻だらけの壯士風の男もいたが——さすがに誰も皆シンとなつて、その發音を聞いた。高先生の中國語は學生達の唯一の高い目標であつた。あの美しい北京語を自分のものにしたいと、誰も切實に思った。山東のご出身であつたZ先生やB先生の時
間には、生意氣な惡童達は「田舎の濁つた發音だな」などと、ひそかに思ったものだ。

秋になつて上海の本校から轉動して來られたJ先生はいつも絹の高級な大褂兒を着て居られた。この先生の發音はきれいだつたが「君」(君)を發音される時、 ju の部分、注音符號で書けばㄐㄩの部分の音が高先生とは違つていた。注音符號のㄐ、つまりüの音が、高先生に較べて、わずかに長く發音されていたのである。分析的に言うならば、üのあとに、風のように微かではあつたがiの音が入るのであつた。颯爽と教室に入つて來られた先生の授業を神妙に受けていた學生たちは、すでに微妙にそれを聞き分けていた。そして、これは高先生の中國語ではないな。と思つた。

那須さんが分校に着任されたのと相前後して文學部では影山巍先生が教官に就任された。先生は上海の同文書院教授として既に高名であつたが、先生もまた北京同學會の古い卒業生であつた。僕は、入學したばかりの九大で二人の先輩に出合ふという偶然にめぐり合つた。那須さんが、研究室から抜け出したばかりの新進という感じであつたのに較べて、影山先生には老練な大家の風格があつた。若い那須さんから聞く北京の話には、いつも淡い郷愁をかき立てられたが、影山先生の北京の話は、僕には昔のことであり過ぎた。それは五・四運動勃發の日の天安門廣場の話であつたりして興味深かつたが、そのような具體的な話よりも、中國人の生活習慣について語られる話のは

うが面白かった。お宅に伺ってみると、何もかもが中國風であった。そして驚いたことに、床の間の掛軸は二本であり、生け花さえも對になつて置かれていた。那須さんのお宅ではそんなことはなかった。現在の僕に多少しみ付いている程の中國趣味さえも那須さんは持とうとしておられないようであつたし、それは後年になつても同様であつた。那須さんの生活は一切が合理的で餘計なものは全部切り捨てられているという感じであつた。那須さんの印象は文科の先生というよりむしろ理科の先生という感であつた。或る時、軍隊の話をしていて知つたのだが、那須さんは砲兵士官であつた。それも觀測の士官であつた。砲兵というのは、砲手、馭者、觀測の三班に分けられていて、觀測班は、照準點を定めねばならない重要な任務を負っている。何よりも正確な計算が必要な仕事である。砲手班の中で最も無能な者は七番砲手といつて彈藥手だが、その七番で二等兵であつた僕には、觀測の將校と言へば、まるで神様か精密機械のように思えていた。だから那須さんから軍隊の話聞いた時、心の中に合點するものがあつた。あの正確な發音はこれだつたんだな。という納得であつた。

北京で學生だつた頃に、上海から來られたJ先生の「君」の發音に最初なじまなかつたが、愛知大學の鈴木擇郎先生の「君」は、これと寸分違わない音であつた。舊同文書院を母體として愛知大學は設立されたが、上海時代以來の中國語の主任であつた鈴木先生の發音がJ先生に似ていたのは、偶然ではないだろう。戦後復員すると間もなく、愛知大學豫科に復學收容された僕たち東亞同文會の學生は、それから毎日のように中國語で泣かされたが、この謹嚴な學者を當時の學生達は皆ひどく恐れていた。しかし家での先生はやさしい人情家で、お供をして漢方藥屋に行つたり、家に泊めて頂いたりしたことさえあつた。鈴木先生の、面長の青白い顔を思い出すたびに、獨特の、

あの「プロ」という中國音がなつかしく浮かんでくるのである。この兩大家は中國語に關しては互に譲られることがなかった。何の時であつたか鈴木先生が

「影山さんという人はねえ、罵人的話のうまいことが中國語のできる條件だと思つてゐるね、そんな所があるね、あの人は」

と、いつもの苦味走つたまじめな顔で言われたことがあつた。僕はこのことは影山先生にはずっと言わないでいたが、影山先生のほうは

「リンムーさんもデキるにはデキるがね、あの人の中國語は終戦の翌日から通じなくなつちやつたんだ」

と、さもあたり前な顔で言われた。僕はこれには恐れ入つた。リンムーさんで通じなければ一體誰が通じただらうかと思ひながら、兩雄並び立たずというやつだなと慨嘆したものだ。だがその昔、鈴木先生が結婚された時の仲人役は影山先生だつたというのだから、面白いものである。半ば傳說的なこの二人の巨匠も、今は既に世に亡い。

影山先生が九大をおやめになつて、ずいぶん経つてからだつたが、濱一衛先生とご一緒に何人かの卒業生がお話をする機會があつた。その時先生は、いつもの剽軽な語りくちで、

「あんた等、ほんま、アホやつたなあ、折角、九大には影山さんのような人が居はつたのに、何で、中國語本氣でやつておかないんだんや、ほんまにアホやつたなあ。今頃言うたかてアカんけど——」

と言われた。それは腹にこたえた。

北京留學時代の數年間を、ずっと周作人の所に寄寓しておられた濱先生の中國語は達者なものであつたが、先生

の話にも随分面白い話が多かった。周作人の家は廣大な舊男爵邸で、その奥まった院子に日本人であった夫人の御両親がひっそりと暮して居られた話。周作人と仲違いして別居した阜成門内の魯迅の家で、薄化粧した上品な魯迅のお母さんにお会いになった話などが印象に残るが、或る時、

「小川環樹さんの中國語聞いたことないやろ、うまいもんでせ。ゆっくりと、正確に話さばる中國語や」と言われたことがあった。遠く離れている僕らには小川先生と漢文が結びついて、中國語との結びつきは少しばかり意外な氣がした。そして知らぬということの恐ろしさをつくづくと思つた。

樂しそうな時の濱先生の口からは、時々辛辣な言葉が飛び出して僕らを笑わせたり惱ませたりしたものだ。その最大の傑作は「音無しの構え」というやつであった。先生は中國語の下手な學生のことを評してよく「音無しの構えでいきよる」と言われた。「大菩薩峠」の劍豪、机龍之助ならぬこの濱先生の「音無しの構え」にかかつては、中文卒業生の殆どが、カタなしであった。話題がたまたま誰かのことに及び、その話が肝腎の中國語にちよつともふれると、

「そやけどなあ、あのコ、今でもまだ音無しの構えでやってんのとちがうか」と、ひと言はいるのである。その絶妙な相の手に一座はどつと湧き、やがてそれぞれが、ふと自らをかえりみてシユンとなるのであった。

影山先生にも濱先生にもそんな辛辣さがあつたが、那須さんにはそれは全くといってよい程なかつた。他の人々のことについて、凡そ話題にされることがなかつたのである。恐らく人間なり人間社會なりに對する興味よりも、

言語そのもの、中國語そのものに對する興味のほうが、遙かに大きく那須さんの心を占めていたのであるうと思われ。

那須さんの中國に關する研究論文は、五十篇をこえるが、これらはすべて語學の論文で占められており、文學に關するものは一篇も書かれていない。ただ一篇、昭和三十六年に「巴金と茅盾の文章」というものが書かれているが、これも語學的側面からの論考であつて文學論ではない。今後も多く論文を發表されるだろうが、恐らく那須さんは生涯にわたつて、或いは遂に文學的側面から中國を論ずるといふことをされないのではないかという氣がしてならない。このように人間に對する關心の稀薄さは、言語學者としての那須さんの恵まれた資質であり、今日の大成を豫測させる大きな要素であつたと思う。那須さんの語學上の研究も、その大部分を占めるものは人間の感情の世界からほど遠い音聲の研究である。昭和二九年の「複音節語の強弱關係について」以降、最近の論考に至るまで、音聲學關係の論文は約三十篇を數えることができるが、この中でも昭和四七年から五二年にかけて「言語科學」に發表された一連の論文「中國語の韻尾鼻音の連音變化」は、那須さんの研究の特色を最もよく示していると言えよう。これは、音響スペクトログラフという音聲分析器を用いての精密な科學的な音聲分析による中國語音の研究である。もうこうなると、門外漢にはお手あげだが、那須さんが明らかにしようとして居られることの一つは大よそ次のようなことだ。

日本人にとって最も區別が困難だと言われている p と p^h において、主母音に音聲的な差異はないと言われているが、後續音節の頭音が非閉鎖音であつたり、あるいは閉鎖音であつてもその閉鎖の位置が韻尾の鼻音と異な

る場合、 $—\text{ロ}$ と $—\text{ロ}$ との區別がどのようになされ、また聽覺的にいかなる手がかりによって識別されるか。

というような、精密な發音上の問題點を、純粹の北京人である（兩親の代からの北京人である）二人の中國人男性の音聲を分析することによって説明しようとして居られるのである。

このような研究は、從來 ロ と ロ との區別が日本人にとって困難であるという認識がすでに一般に存在していたにもかかわらず、誰一人として手をつける者がなく、器械類を使用しての科學的音聲分析はおろか、人間の耳に頼った主觀的な研究さえも、全くなされていなかったのである。しかし那須さんの北京語音に對する繊細な識別能力は、このことに我慢がならなかったであろう。この未開拓の分野に鋭い斧が打ち込まれることになったのである。

この一連の研究からも見られるように、那須さんの問題提起の根底には、常に正確無比な那須さん自身の北京語が確乎として存在していたのである。もし那須さんに、自分が北京の學生時代に苦勞して身につけた北京語音に對する絶對の自信がなかつたならば、このような音聲學上の一連の問題提起は恐ろくなされなかつただろうし、研究の成果も見られなかつたであろう。

北京語、廣東語、上海語にわたつての多數の著述となつて残つた影山中國語は、那須さんにとつても或いは越えねばならぬ大きな嶺であつたかも知れないが、二十代にして、既に中國を離れねばならなかつた那須さんには、それは叶わぬ夢であつたと言わねばなるまい。だが那須さんは、戦後の四十年を、その耳底深く正確に刻み込まれた北京語音を武器として、獨自の世界を着實に切り拓いて行かれたのであつた。そしてそれは今日、那須音聲學とし

那須さんの北京語（上尾龍介）

て大きな餘りを見せ、現代中國語學界に確かな足跡を残すに至ったのである。この独自の學問的業績を築き上げる過程での那須さんの四十年は、中國との國交の絶えた永い年月でもあった。だから那須さんの戦後はひたすらなる望郷の四十年であったと言えるだろう。この四十年の間に那須さんは、その絶ち難い青春の北京への思いを、一歩一歩たしかめるように、その研究の仕事を積み上げて行かれたのであろう。

幅廣い中國語にあまねく通曉された影山先生も、中日大辭典を生涯かけて完成された鈴木先生も、共に巨大な先達であつたが、独自の中國語音聲學を見事に開拓された那須さんの業績も、また大きく後世に輝くことであらう。

那須さんも、この春から九大を去られることになった。もう、あの透明な北京語を九大で聞くことはできなくなつてしまった。遠い日の高玉珊先生が、今また一歩、僕の記憶から遠ざかつて行かれるような氣がしてならない。そのうち、若しかすると自分の發音の基準さえ見失つてしまふかも知れない不安に、いま僕は驅られてゐるのだ。最近、濱先生にお會いする機會もさっぱりなくなつてしまつたが、もし何かの折りにお會いすることもあれば、きっと先生は、少しばかり口もとをすぼめるようにして、

「あんたら、アホやなあ。せつかく那須さんが九大に居はつたのに、何で發音なおして置かなんだんや」と、いつもの皮肉まじりにおっしゃるかも知れない。